

ブリーフィング・メモ

フォークランド（マルビナス）戦争における航空優勢について

戦史研究センター国際紛争史研究室 柳澤 潤

はじめに

フォークランド戦争は、1982年南大西洋上に浮かぶフォークランド（アルゼンチン呼称：マルビナス）諸島等の領有権を巡って争われた、西側に属するイギリスとアルゼンチン二国間の戦争だった。この戦争の特徴は、西側艦隊が連続的に航空攻撃を受けた第二次世界大戦以来の、しかもジェット時代としては初めての戦争で、エグゾセ空対艦ミサイルやAIM-9L空対空ミサイル等の新兵器が多用された戦争だった。

イギリスは同諸島再奪回の上陸作戦及びその後の戦闘について、当然のことながら航空優勢の確保を前提として考えていた。他方アルゼンチンは戦力を温存して上陸時に戦力を集中するとともに、エグゾセによる攻撃でイギリスの航空優勢を相当程度拒否することに成功した。この戦争では、空対空戦闘でのシーハリアーの圧勝がよく知られているが、実際にはイギリスの航空優勢は不十分であり、それゆえに危うい場面もあった勝利ともいえる。本稿ではフォークランド戦争における戦闘の状況と航空優勢の推移をふり返し、それらが与える示唆を考察する。

1 フォークランド諸島の地理的特性

フォークランド諸島は南米大陸南端のフエゴ島のほぼ東方に位置し、東西二島の大きな島と300以上の小さな島から構成されている。合計面積は約12,000 km²で、四国の約三分の二の広さである。これをイギリス本土から見ると、同諸島までの距離は約13,000 kmある。戦争中この諸島への中継地となった英領アセンション島は、大西洋の赤道近くに位置し、そこからでも約6,300 kmの遠距離にある。アルゼンチンから見ても同諸島は比較的遠くにあり、最短距離の南米本土飛行場からでも約700 kmある。

2 戦争経過の概要

1982年1月アルゼンチン軍事政権は、イギリスの同諸島支配150周年(1983年)を前に、軍事力を行使してでも年内に「マルビナス」を奪回することに決定し、計画立案を開始した。偶然にも3月アルゼンチン人が入国手続きを無視してサウスジョージア島（フォークランド諸島から東南東約1,400 kmにある英領）に上陸した。イギリスは強制的にこれを排除しようとしたのに対し、アルゼンチンも態度を硬化させ「マルビナス」奪回の軍事作戦の即時発動を決意した。4月2日ほとんど無防備の首都スタンレーにアルゼンチン軍海兵隊約900名が上陸作戦を行い、1日で占領した。今度は約12,000名のアルゼンチン軍が守る同諸島へイギリスが任務部隊を送り込んだ。5月1日から海空戦闘が始まり、5月21日イギリス軍の同諸島上陸、その後の陸海空にわたる戦闘の末、6月14日アルゼンチン駐留軍が降伏し、再び同諸島はイギリスのものとなった。

3 航空戦経過の概要

(1) イギリス・アルゼンチンの航空戦力

イギリス・アルゼンチン双方とも多種類の航空機を投入したが、本稿では航空優勢に関連する主な機種を紹介する。イギリス側でこの戦争に参加した戦闘機は、海軍航空隊のシーハリアーFRS.1が28機であ

った。攻撃機は空軍のハリアーGR3 10機が戦争途中から空母より運用され地上攻撃にあたり、シーハリアーを戦闘任務に集中させた。爆撃機はアセンション島を基地とするバルカン3機が使われた。

アルゼンチンの戦闘機は空軍のミラージュⅢ 15機であり、攻撃機護衛や「おとり」として使われた。攻撃機は空軍がダガーを約30機、A-4B/C型を約40機、海軍はA-4Qを10機、シュペル・エタンダール5機保有していた。空軍は空中給油機KC-130H2機を保有しシュペル・エタンダール及びA-4の攻撃任務を支援した。

(2) 最初の空対空戦闘

両軍の本格的な戦闘は5月1日から始まった。イギリスの空母2隻を中心とする空母戦闘群がフォークランド諸島に接近した。イギリスの目的は、上陸作戦準備としてアルゼンチン海空戦力を撃破し、海上・航空優勢を確立することだった。一方アルゼンチンは空母戦闘群の中に上陸部隊が存在すると誤解し、その目的はイギリス上陸部隊の洋上撃破だった。

最初の攻撃はアセンション島を離陸したバルカン爆撃機1機がスタンレー空港を爆撃、滑走路に1発穴をあけた。0800（現地時刻）からシーハリアーによる同諸島への地上攻撃と空中戦闘哨戒（Combat Air Patrol: CAP）が行われた。アルゼンチン空軍も本土から多数の戦闘機・攻撃機を発進させ、イギリス軍と空戦となった。戦闘の結果はシーハリアーの一方的勝利で、損害なしで4機を撃墜した。以後アルゼンチン航空部隊はシーハリアーとの直接の戦闘を回避しようとした。

(3) エグゾセ・ミサイルによる対艦攻撃

5月4日イギリス空母戦闘群は、さらに相手の海空戦力を減耗しようとフォークランド南方海面まで進出した。アルゼンチンはこれを探知し、シュペル・エタンダールが接近してエグゾセを発射した。空母戦闘群は全く油断しており駆逐艦「シェフィールド」にエグゾセが命中、大火災となり沈没した。エグゾセによる戦闘艦の損失は空母の運用に大きな影響を与えた。空母の保護は絶対であり大陸本土の航空基地からシュペル・エタンダールが空中給油を受けても届かない距離に空母戦闘群を配置した。このためシーハリアーのフォークランド上空CAP時間が減少した。一方アルゼンチンは上陸部隊が存在しないことを確認し、航空攻撃を抑制し戦力の温存を図った。

(4) 上陸作戦をめぐる航空戦

5月21日0330イギリスはフォークランド東島のサンカルロスへ上陸を開始した。アルゼンチン空軍は艦載レーダーをかわすため低高度侵入に徹した。21日から25日まで激しい航空戦が続いた。アルゼンチン軍第一線級機の被撃墜数は19機であり、5日間の合計出撃数151に対し13%と高い。一方5日間の戦果は、イギリス艦船4隻を大破・沈没させ、8隻を中破・小破した。しかしイギリスは必要なだけの戦力を持つ陸上部隊を上陸させることに成功した。それに対してアルゼンチン航空部隊は26日以降勢いを失い、同諸島からイギリス軍を追い出す望みを失った。

4 フォークランド戦争と航空優勢の関係

(1) 戦闘の目標と航空優勢

「航空優勢」はその語感から連想される空での戦い（狭義には戦闘機による空対空戦闘）の優勢度合いではない。アメリカ軍やNATOにおける航空優勢の定義では「所与の時間、場所における陸、海、空部隊の作戦を妨げられることなく実施可能にする、一方の軍の相手方の軍に対する、空における戦いの支配の度合い」とされている。この戦争でイギリスは上陸作戦を伴う島嶼の再奪還、アルゼンチンはその阻止を達成しようとしていた。その中で各々の目標達成のため両国にとって望ましい航空優勢は何だったのか。

イギリスにとっては、相手に妨げられることなく上陸作戦及びそれに続く地上作戦（敵兵力が集中して

いるスタンレー攻略)を行えるよう、空における戦いを支配することだった。アルゼンチンにとっては、相手の航空作戦によって再奪還部隊撃破のための諸作戦を妨げられないように、空における戦いを支配することだった。

これらの航空優勢を実現させるため両国はどのような方策・手段を取れば実現できたのだろうか。イギリス航空部隊にとって、相手航空戦力の主力である南米本土配置部隊を攻撃することは政府の交戦規定で禁止されていた。取り得る手段は、航空機、搭載兵器及びパイロットの質の優位を生かし、上陸作戦より前に来襲する相手航空戦力を消耗戦にもちこみ減耗させることだった。さらに上陸時以降、相手航空戦力から防護対象を守り抜く必要があった。いずれも作戦態様としては防勢対航空となる。

アルゼンチンにとっては、洋上における再奪還部隊撃破を実現するために相手航空戦力の源泉である空母ごと(可能であれば艦艇搭載の対空兵器も)無力化することが望まれた。それが不可能なら、少なくとも上陸作戦時の上陸部隊に対する、主として航空戦力による作戦を可能とする程度に空における戦いを支配する(あるいは相手に支配されない)必要があった。作戦態様としては攻勢対航空及び航空阻止となる。

(2) 分析：両国はそれぞれ航空優勢をどの程度実現できたのか。その失敗の要因は何か。

イギリスは、上陸作戦がしばらく無いことをアルゼンチンに見抜かれ、企図していた消耗戦に持ち込めなかった。またアルゼンチンの攻勢対航空(エグソセの攻撃)によって航空戦力の源泉である空母に脅威が及んだ。それにより自らの戦力発揮基盤が戦闘地域との距離をとらざるを得なかったためフォークランド上空に十分なCAPを充当できなかった。また早期警戒機の欠如もあり低空多数機進入に対する効果的・効率的な防勢対航空ができなかった。よって上陸作戦時には上陸地点上空におけるイギリスの航空優勢は不完全であり、人員と物資に損害をもたらし、上陸作戦及びその後の地上作戦に遅れを招いた。しかしその程度は結果的には許容範囲内であり勝利を得ることができた。

アルゼンチンにとって最上の航空優勢は攻勢対航空(エグソセの攻撃)による相手空母2隻の撃沈で達成できるが、それはかなわなかった。5機、5発という機数と弾数の制約、搭乗員の兵器への未熟及びイギリスの電子妨害が影響したと思われる。それでもイギリスの航空機そのものを撃破できなくとも、重要な戦域における実質的な相手航空戦力(CAP可能時間)を相当程度減少させることができたのである。

アルゼンチンは、イギリスのCAPが不十分な中、相手が脆弱となる上陸地点での航空阻止に温存していた戦力を集中し、「爆弾横町」とも呼ばれた苛烈な攻撃を行うことができた。しかしイギリスに相当の損害を与えたものの、結果的に同国の上陸作戦とその後の地上作戦を阻止には失敗した。この失敗の要因は第一に(航続距離一杯での攻撃で余裕が無かったにせよ)輸送艦船ではなく戦闘艦を攻撃目標としたこと、並びに対艦船攻撃のための爆弾の信管設定に対する無知もあり(相当数の不発弾があった)、最大の勝機を活かせなかったこと、第二にシーハリヤーに対抗できる能力や意志の欠如と共に、艦対空ミサイルを制圧できる兵器システムも無く、上陸部隊への航空阻止の間に戦力が大幅に減耗したことが挙げられる。

5 この戦争における航空優勢の与える示唆

イギリスは防勢対航空でアルゼンチン航空戦力を撃破しようとした。しかし攻撃する、しないは攻撃側の意志にかかっており、相手が攻撃してこなければ消耗戦が成り立たない。ただでさえ攻撃優位の航空戦において防空で勝つことは難しい。ましてや防衛/奪還対象が前方(自軍と相手軍の主力の中間)にあり、お互いに前に出なければならぬ島嶼作戦の特質や、早期警戒機が無く低空侵入機要撃を効果的・効率的にできない場合は、その困難を倍加した。

イギリスは、アルゼンチンの攻勢対航空(エグソセの攻撃)の脅威により、空母を戦域から離さざるを得ず、その影響で戦域における航空優勢が減少するジレンマを経験した。空母を守るため戦域から離して陸海空諸作戦を危険にさらすのか、最重要な地域での航空優勢を獲得するため空母を前に出して、ただ二つの航空資産を危険にさらすのか、難しい判断である。

バルカン爆撃機によるスタンレー空港爆撃は、実質的な戦果は無かったが、首都空襲の脅威を感じたアルゼンチンは戦闘機を本土に分散させた。これらは上陸部隊攻撃時に貴重な護衛戦力となり得るものだった。このように自分の能力を見せつけて相手のパーセプションに働きかけ、直接的効果以上に付随的に大きな効果を挙げたことは注目に値する。

エグゾセばかりに目が行ってしまうが、アルゼンチンで最大の戦果を挙げたのは A-4 でも最も古い型である B 型であることを忘れてはならない。10 機の損害で沈没/大破 4 隻、中破以下 3 隻を記録した（信管設定の不備による不発弾が無ければ損害は遙かに大きく、イギリスの勝利とはならなかった可能性もある）。旧式の兵器でも甘く見てはいけないことを示している。

おわりに

この戦争は、イギリスはアルゼンチンがフォークランドを奪還することを、アルゼンチンはイギリスが再奪還に来ることを予想していなかった戦争で、南大西洋で使うことを予期してない手元にある兵器で戦われた。例えばアルゼンチンのミラーシュ III、ダガーは空中給油装置が無く行動半径の短さに悩んだ。一方イギリスは戦争中に C-130、ニムロッドに空中給油装置を付加し広大な南大西洋で任務に就いた。また戦争に間に合わなかったが「シェフィールド」沈没後、シーキング・ヘリコプターにサーチウォーター・レーダーを搭載し7月23日初飛行、これも1983年就役予定を1982年に早めて就役した空母「イラストリアス」に搭載し、シーキングは緊張状態の続いていた南大西洋で早期警戒任務についた。

将来を正確に予想することは重要なことだが、人間であるから限界もある。予想外の事態に臨機の処置をとりえる発想とそれを実現する技術力という点で、イギリスはアルゼンチンに勝り、またそれが不十分な航空優勢の中でもイギリスが優位に戦えた一因であったと考える。

【主要参考文献】

- A・プライス、J・エセル『空戦フォークランド：ハリヤー英国を救う』江畑謙介訳、原書房、1984年。
- Rodney A. Burden, Michel I. Draper, Douglas A. Rough, Colin R. Smith, David L. Wilton, *Falklands the Air War* (Dorset: Arms and Armour Press, 1986).
- Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign*, Volume I, II (London: Routledge, revised and updated edition, 2007).
- Chris Hobson with Andrew Noble, *Falklands Air War* (Hinckley; Midland, 2002).
- Lené De La Pedlaja, "The Argentine Air Force versus Britain in the Falkland Islands, 1982," Robin Highman and Stephen J. Harris ed., *Why Air Forces Fail: The Anatomy of Defeat* (Lexington, Kentucky; The University Press of Kentucky, 2006) pp. 227-259.
- Santiago Rivas, *Wings of the Malvinas: The Argentine Air War over the Falklands* (Manchester; Hikoki Publications, 2013, first published 2010).
- Robert L. Scheina, *Latin America: A Naval History 1810-1987* (Annapolis; Naval Institute Press, 1987).

(2018年11月8日脱稿)

本稿の見解は、防衛研究所を代表するものではありません。無断引用・転載はお断り致します。

ブリーフィング・メモに関するご意見・ご質問等は、防衛研究所企画部企画調整課までお寄せ下さい。

防衛研究所企画部企画調整課

外 線 : 03-3260-3011

専用線 : 8-6-29171

FAX : 03-3260-3034

※防衛研究所ウェブサイト : <http://www.nids.mod.go.jp>